

## 会員の声

## 天文学の地平は広い

仲野 誠（大分大学教育福祉科学部）

最近二つの問題提起が本誌上で行われています。一つは昨年11月号に出た佐藤明達さんの「スプライトはどこに発表すべきか？」[1]、もう一つは嶺重慎さんの「全ての人に天文教育・天文普及を」[2]です。このお二人の記事は偶然ながら本会の進むべきやや異なる方向を示していると感じました。

私自身は佐藤さんのような声があること自体に驚きました。まず研究の細分化は仕方なかったこととは言え、その後研究が蝸壺化することに対する自省が広がっていることもおさえておく必要があります。昨今では自然科学分野の研究と一般の人たちとの間にある種の乖離が生まれ、あやしい科学や非科学的な見方が巷に広がっています。これはここ数年来、養成の重要性が叫ばれている「科学コミュニケーター」の存在とも無縁ではありません。このことに対しては天文学という側面からも接点を探るべきだし、矢治さん[3]のように実際に積極的に関わっている会員もたくさんおられます。

本会は地学教育ではなく天文学に特化した研究会であることも事実です。しかし、天文学という分野を自然科学の一分野と限定的に考えることで、本会に何らかのメリットがあるとは考えられません。私は、天文学は物理学の1つの分野としても、地学の1つの分野としても大変実り豊かな科学分野であると信じています。隕石も、月の地質も、土星のオーロラも、ひも理論も、望遠鏡の鏡の研磨技術も、能動光学技術も天文学の一部でしょう。

また本会はその設立の胎動期から議論があったように「天文教育」と「天文普及」の2つを基盤とする団体です。当然ながら一般普及に関心のある方々もかなり参加されている

ことを忘れてはならないと考えます。本会の求める方向はどこにあるのでしょうか？私は個人的には天文学の地平は以前よりも広がってきていることを実感します。さらに、天文学は文化とも結びついている希有な学問分野だと思います。だからこそ本会でも天文普及という比重が大きいのだと思います。さまざまな面でコラボレーションが求められる時代、思いきり手を広げて良いのではないのでしょうか？その広がりや自己規制することにより得るものはないと思います。

大学の一般教養科目も担当している私は、以前「狭い」天文学だけを教えていました。しかし今ではその中に地球や生命の話も多く取り入れ、それと天文学との関わりについて語ることの重要性をますます意識するようになりました。嶺重さんは「天文学を学べない大学」を調べる必要性を述べておられます。さらに大学の一般教養でも天文学を教えないところが沢山あるのではないのでしょうか？

「スプライトの投稿によって天文学そのものを扱った文章が減るのではないか？」という佐藤さんがデメリットとしてあげられるその恐れは、本誌の現状では残念ながら杞憂でしょう。嶺重さんは日本天文学会の欧文研究報告誌にもっと天文教育の論文を出すべきではないかという問いかけも会員にされています。当会の年会はもちろんのこと天文学会総会でも天文教育の発表はコンスタントに行われるようになってきました。これは大変すばらしいことです。しかし本誌でも天文現象の解説や紹介は毎月そこそこありますが、「天文教育」や「天文普及」そのものの報告や論文の数は依然として低調なのは大きな問題です。

本会には教育でも普及でも、天文と境界を接するさまざまな分野に網を張り、その問題意識を持ち続ける必要があるでしょう。本会の未来を考える意味で佐藤さんと嶺重さんのご意見は考えさせられるものでした。

#### 参考文献

- [1] 佐藤明達, 2005, スプライトはどこに発表すべきか, 『天文教育』, 11月号, p.49
- [2] 嶺重慎, 2006, 全ての人に天文教育・天文普及を, 『天文教育』, 1月号, p.21
- [3] 矢治健太郎, 2006, どこまでが天文教育か?, 『天文教育』, 1月号, p.33

#### [速報・編集部より]

#### 世界初！恒星に2重円盤を発見！！

西はりま天文台のなゆた望遠鏡でプレオネのスペクトルの観測を行ったところ、この星に33年ぶりに新しい円盤が形成されていることが判明しました。2つの円盤をもつ恒星の発見は初めてです。

なおプレオネは5等級のBe星（スペクトルに輝線を伴うB型星）で、プレアデス星団（すばる）に属しています。

<http://www.nhao.go.jp/pleione.html> より



内側の円盤が今回発見されたもの  
イラスト提供：坂元誠氏（西はりま天文台）